「栄光とは神様がお喜びになること」

クリスマスおめでとうございます。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

（ヨハネ１：14）

降誕日（クリスマス）礼拝に読まれる福音書です。

言は神さまです。神さまが肉体をとって私たちのもとに来られたのです。それがイエス様の誕生です。

イエス様の誕生は「父の独り子としての栄光であって恵みと真理とに満ちていた」とあります。

栄光とはギリシャ語で「ドクサ」と言い、4 福音書に 79 回、そしてなんとヨハネ福音書には 42 回も出てきます。ヨハネはよほどの栄光好きなのでしょうか。栄光の意味は文字通り「光り輝く」という意味もあるのですが、それは稀です。多くの意味は「神様が太陽の数万倍のように輝くような心が躍る喜びが現れた状態」が栄光の意味だそうです。

そう考えてみるとクリスマスの出来事は周囲が明るくなるほどのまばゆい光輝くのではなく、やはりベツレヘムの家畜小屋で飼い葉おけに寝かされているイエス様の周囲はわずかな灯りがあっただけであったと私は想像します。それでは「わたしたちはその栄光を見た」というのは何を言わんとしているのでしょうか。栄光の意味から読み取るならばそれはイエス様の誕生を天におられる神様が心から喜ばれているということを私たちは信仰を通して知るということです。「見た」というのは実際にベツレヘムの家畜小屋のイエス様を見たわけではありませんのでそういうことを言っているのではありません。

「栄光」が現れる時は「神様が心からお喜びになっている」しるしなのです。99 匹の羊と迷子の 1 匹の羊の物語でも、あの放蕩息子のたとえ話でも 1 匹の話が見つかった時、そして放蕩の限りを尽くしたお父さんのもとに帰ってきた息子を抱きしめた時に「天には大きな喜びがある」という表現が出てくるのです。つまり「栄光が現れた」のです。

人の目によれば神の栄光は時に理解できない、受け入れられないこともあると思います。クリスマスの出来事も私たちがイメージするような栄光ではないかもしれません。神様がお喜びになることは私たちの価値観と正反対のように思えてなりません。そして、私たちはその神の栄光をクリスマスの出来事を通して見たのです。そして神の栄光のために生きるようにいつも招かれているのです。

（司祭　越山哲也）